



防衛庁陸上自衛隊 1等陸佐

# 岩村 公史 氏

IWAMURA Kimihito

...

## 現地の人たちの力を使って施工

—わが国の自衛隊では、2004年1月からイラクにおいて人道復興支援活動を行っています。岩村1等陸佐は、第3次イラク復興業務支援隊長として、2005年1月から同年7月まで業務を行ってきたということですが、これまでのイラク人道復興支援活動についてお話を聞きます。

岩村—常時600人くらいの自衛隊員が現地に宿営し、支援活動を行っています。ただ

し、今回、イラクで行われた人道復興支援というのは、これまで自衛隊が行ってきた活動とはやや違ってきます。東ティモールやカンボジアで、自衛隊が自らの力で道をつくるなどの活動をしてきましたので、皆さんはイラクでも同じだと思われるのではないのでしょうか。今回、われわれがイラクで行ってきた公共施設の復旧・整備の分野では、従来型の自隊施工型ではなく、施工管理型と呼ばれるもので、現地のニーズを聞き、計画、調整した後に現地のコンストラクターの人たちの力を使って施工を行ってきました。

実際になかなか活動内容が日本には伝わっていないようですが、「イラク特措法」と「基本計画」に基づき、医療支援、公共施設の復旧・整備、給水

活動という大きな3つの柱に従って、10月現在で現地部隊は、医療では約200回、公共施設では100個以上のプロジェクトを完了または計画、実行しています。

—イラクの現地の人たちを雇用して復興を行っているということですが、実際にどのくらいの雇用が生まれているのですか。

岩村—私がいた期間では、1日最高1,000名を超える雇用を発生させました。10月現在、延べで30万人を超える雇用を発生させているというのが統計として出ています。そういう面では、地域経済にもプラスになっていると思います。

## われわれの想像を絶する厳しい気候

—サマーワの気候についてですが、日中と夜間の気温と湿度、雨



写真-1 サッカーボールをプレゼント



写真-2 サッカー少年とのふれあい



写真-3 建物の外観を点検

の頻度はどの程度なのでしょうか。  
**岩村**——これも皆さんがイメージされているものと大きく異なります。暑いことは確かです。私自身、直射日光下で57度という暑さを経験しました。これは、体の前30cmのところにはヘアドライヤーが並べられ、一気に熱風を浴びているという感じでした。地表面ではさらに60～70度くらいに達しているかもしれません。

反面、1月には、マイナス3.6度と水が凍るような気温にもなります。また、現地は砂漠なので皆さんは雨が降らないと思われるのですが、今年の1月22日はトータルで35mmという陸自が展開して以来、過去最高の雨が降りました。現地は地面が平らで粘

は直径最大30mmのヒョウも降りました。

12月～3月くらいまでが雨季で、それが終わると砂嵐の時期になり、雨はほとんど降りません。4月には風速37m/sというものすごい砂嵐で、天幕が吹き飛ばされたり、周りの柵が押し倒されたりしました。われわれの想像を絶する日本では考えられない非常に厳しい気候でした。

——そのようななかでは、体調の管理が難しいと思いますが、どのようにしておられたのでしょうか。

**岩村**——50度を超える暑さのなかで、鉄の塊である軽装甲車両は、午後には熱せられ、車両内は80～90度にもなります。クーラーを効かせても熱風が出るだけ。長距離の移動

土質のため、水が流れず、積もるような感じになります。一面、湖のようになり、ここが砂漠のサマーワかという感じでした。しかも、3月に

ではオーバーヒートしてしまいますので、クーラースイッチを切ります。窓も弾が飛んでくると危険ですから閉めています。それで防弾チョッキなど重装備ですから、熱中症にならないようには気を使いました。日本では意識しなくてもいいことでも、現地では意識して行わないとダメなのです。たとえば、現地では湿度が10%くらい低いですから、どんどん体の水分が失われていきます。自分の気がつかないうちに水分がなくなっている。ですから、計画的に、たとえば外で1時間作業したら、2リットルのペットボトルの水を1本飲むというように意識しないと、脱水症状に陥ってしまいます。それが国内で勤務しているときの違いです。睡眠もそうです。無意識にできたところを意識的にやる。そういう管理を徹底させていました。

## 医療支援の分野が 先行

——現在の支援状況は、目標の大体何パーセント達成していますか。

**岩村**——人道復興支援のニーズにというのは、山ほどあります。そのなかで自衛隊のできることも、もしくは現地の外

務省のできることには限度があります。ただし、サマーワ周辺のムサンナ県には PHC という診療所が 33 箇所あります。そこから、症状が重い場合は、大病院に搬送するのですが、医療支援活動として患者が PHC から大病院に後送される一連のシステムの確立を進めました。33 の PHC のなかでも補修の必要なところが 23 あり、そのうち 8～9 は完成し、10 いくつが進行中で、今年の 11～12 月にはすべて完成近くまでいけそうですので、そういう意味では医療支援に関しては、8 割くらいはできたのではないのでしょうか。さらに、外務省の ODA (政府開発援助) により、われわれの補修した PHC に医療器材や設備などを提供する予定です。また、大病院への搬送に関して、外務省が救急車を提供し、われわれ陸自が乗組員への教育を行っています。また、基幹となる大病院の医師などを陸自医官が指導しており、こうした医療支援の分野が復興支援のなかでは一番進んでいると思います。

——学校はどうか。

岩村——ムサンナ県には、学校は全部で 300 校くらいあり

ます。そのなかで陸上自衛隊は 30 校くらいを補修しました。あわせて日本から緊急無償資金協力をしている UN-HABITAT (国連人間居住計画) で 60 数校、トータルで 100 校くらいを日本の力で直しています。全体の 3 分の 1 ですから、これは 1 つの大きな成果だと思っています。また、ムサンナ県にある養護学校 4 校は陸上自衛隊で補修しましたので、養護学校に関しては 100% 補修したといえます。

## 復興支援はソフトが重要

——今後の活動としては、どういったところに力を入れていくべきですか。

岩村——復興支援というのは、ハードだけではダメで、ソフトが重要です。日本が 60 年間でここまで復興できたのは、モノが贈られて復興したのではなく、われわれの両親や祖父母などの世代が一生懸命努力したことでできたと思うのです。イラクを

復興させるために、日本として今は資金やモノの補修などのハード面を主として実施していますが、人を育てるなどのソフトの部分に、われわれのもっている資源を集中させることで、トータルな復興ができるのではないかと考えています。たとえば、現地では橋をつくる十分な技術がありません。そこで、防衛施設庁の技官が 2 名行き、日本の設計で橋をつくり、現地のコンストラクターにノウハウを教えていきました。その指導もなるべく現地のエンジニアにさせ、人を育てていこうとしています。われわれはモノを通じて人を育てようとしているのです。

また、ワルカ、ルメイサという町に大きな浄水場があるのですが、それをさらに大きく補修し、近々、日産 1 万ト



写真-4 現地支援についての調整

## インタビュー

会誌編集委員  
玉川伸久



ンくらいの水を従来の分に加えて供給できるようになります。しかし、それだけでは人の口に届きません。そこで、外務省サマワ事務所の人びとと調整し、UNDP(国連開発計画)が、自衛隊の直した浄水場や外務省が供与した浄水機から引く水道管を、その地域の現地の人たちを雇ってつくるというシステムを構築しました。それによって、われわれのつくった浄水場の水が、現地の人たちのつくった水道管に乗って、現地の人たちの口に届くようになります。これは完成までにまだ何年もかかることですが、現在も継承されていると聞いてます。

## そこにヒーローはいらない

——現地の人たちの日常生活は改善されつつあるのでしょうか。  
岩村——少なくとも、これまで水の飲めなかった人たちに、一人でも多く水が飲めるように努力してきましたし、われわれの施工管理をした屋根のある小学校で子どもたちが勉強できるようになりました。また、外務省サマワ事務所の人びとと連携をして、発電機の設置を調整し、これまで電気がこなかった家に



写真-5 インタビュー風景

電気が点いて、明かりの下で家族の団らんがもてるようになったと思います。すべてが劇的に変わっているかはわかりませんが、一人でも多くの人たちがそのような恩恵を受けられるように努力しました。

われわれとしては、結果としてきちんとした国ができればいい。子どもたちがしっかり自立できればいいと思っています。われわれは、誰のためでもなく、イラクの将来のために、日本の国民を代表して、淡々と任務をこなすだけです。そこにはヒーローはいりません。名前も残すつもりはありません。ですから、橋や道をつくっても「ジャパン〇〇ロード」という名前はつけない。モノは残した瞬間

に忘れ去られます。われわれが残したいのは“心”なのです。われわれがつくった道路にアサザッカ(友情)道という道路標識が現地の人びとによって掲げられました。誰がつくったということは現地の人たちは知っています。友情道路という名前を聞いたら、それは日本がつくったのだと覚えていてくれます。そこにジャパンという名前をつけたら、その瞬間に忘れ去られます。部下にも「ヒーローはいらない。一人ひとりが地道に日本の人たちの善意を現地に伝えていこう」と言っていました。それは私の前任者から申し受け、後任者にも申し送っています。

——ありがとうございました。